

[成果情報名] 茶早生品種「さきみどり」は抹茶の色が優れる

[要約] 本県茶奨励・認定品種の早生品種のなかで、一番茶抹茶の品質が優れるのは「さきみどり」であり、「やぶきた」、「おくみどり」と同等である。

[キーワード] 「さきみどり」、抹茶、色相角度

[担当] 長崎県農林技術開発センター・果樹・茶研究部門・茶業研究室

[連絡先] 0957-46-0033

[区分] 茶

[分類] 指導

[作成年度] 2020 年度

[背景・ねらい]

近年、日本茶の消費が低迷する中、抹茶の需要は拡大しており、全国の茶産地で生産されている。本県でも、平成 27 年より新製茶ハイブリッドラインが、令和元年より煉瓦式碾茶炉が稼動している。

しかしながら、本県茶産地は主に蒸し製玉緑茶の産地として発展してきており、抹茶の原料となる碾茶栽培技術については、品種や被覆資材等も含め手探り状態である。

これまで、碾茶栽培への適性が確認された茶品種は中生品種の「やぶきた」、晩生品種の「おくみどり」であり、前者は品質が、後者は品質・収量ともに優れる。一方で、今後の抹茶需要の拡大に対応していくためには、中生品種および晩生品種に加え、早生品種を選定し作期分散を図ることが必要となる。

そこで、本県茶奨励・認定品種のうち早生品種である「さきみどり」、「さえあかり」、「さえみどり」の中から、抹茶の色などの品質が優れる品種を選定する。

[成果の内容・特徴]

1. 一番茶生葉を碾茶として簡易的に製造した場合、から色および抹茶の色は「さきみどり」が最も優れ、抹茶の色相角度の値も高く、「おくみどり」や「やぶきた」と同等である（表 1）。
2. 二番茶生葉を碾茶として簡易的に製造した場合、から色、抹茶の色および色相角度の値を早生品種の中で比較した場合、3 品種とも同等であるが、「おくみどり」や「やぶきた」と比べるとやや劣る（表 1）。
3. 一番茶および二番茶の生葉収量は、早生品種の中で比較した場合、3 品種とも同等である（表 2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 抹茶は、「碾茶(覆下栽培した茶葉を碾茶炉等で揉まずに乾燥したもの)を茶臼等で微粉末状に製造したもの」と定義されている（日本茶業中央会「緑茶の表示基準」）。
2. 碾茶栽培における長期被覆は、1.5～2.0 葉期に遮光率 85%の黒色寒冷紗（ワイドスクリーンBK1212）を用いて、一番茶で約 21 日間、二番茶で約 14 日間、直接被覆した。
3. 摘採した生葉は、2 K送帯蒸機で 30 秒間蒸熟した後、透気式棚乾燥機で攪拌しながら約 2 時間乾燥した。乾燥した茶葉は、茎葉分離し、粉碎（UDY 粉碎機）して測色、官能評価に用いた。
4. 官能審査において、から色は湯で浸出した後の茶殻の色であり、染まりが均一で青く冴えた明るい色調のものを上位とした。また、抹茶の色は鮮やかな緑色のものを上位とした。
5. 年間窒素施肥量は 50kgN/10a で栽培した茶園である。

[具体的データ]

表1 一番茶および二番茶の碾茶・抹茶品質

品種	一番茶			二番茶		
	から色 (点)	抹茶の色 (点)	色相角度 (h°)	から色 (点)	抹茶の色 (点)	色相角度 (h°)
さきみどり	3.7	4.3	119.1	2.0	2.7	112.5
さえあかり	3.0	3.7	118.4	2.2	2.7	112.0
さえみどり	3.0	3.3	116.3	2.2	2.2	111.8
おくみどり	4.2	4.2	118.9	2.8	3.2	113.0
やぶきた	4.0	4.3	118.7	2.5	3.2	112.2

- 注1) 官能審査は各項目5点満点で、研究員4名の合議制による。
 2) 抹茶の緑色の濃さを示す色相角度 (h°) は、色彩色差計で計測した。
 3) 各項目の点数および色相角度 (h°) は3か年の平均を示す (n=3)。

表2 一番茶および二番茶の生葉収量

品種	一番茶				二番茶			
	収量 (kg/10a)	出開度 (%)	百芽重 (g)	摘芽数 (本/m ²)	収量 (kg/10a)	出開度 (%)	百芽重 (g)	摘芽数 (本/m ²)
さきみどり	514 n. s. ²	82	76	978	356 n. s.	96	45	1150
さえあかり	591 n. s.	84	73	1205	425 n. s.	94	40	1320
さえみどり	450 n. s.	91	67	1147	464 n. s.	99	43	1434
おくみどり	774	93	84	1291	330	91	31	1354
やぶきた	576	98	85	997	348	99	46	1150

²n. s. : Tukey の多重検定により 5%レベルで有意差なし。

注1) 両茶期とも、2018年～2020年の平均収量を表示している (n=3)。

[その他]

研究課題名：多様なニーズに対応した原料用茶葉栽培技術の開発

予算区分： 県単

研究期間：2018～2021年度

研究担当者：中尾隆寛、寺井清宗、藤井信哉